まんのう町教育委員会だより

爽風（そうふう）

子どもの健やかな成長を願って

Vol. 43
令和6年【2024】
6月1日 発行

特集 子どもを伸ばす魔法の力 ― 非認知能力

Contents

P.2 まんのう町学校教育実践指針
P.3 希望溢れる新たな出発
P.8～9 園・学校ウォッチング 満濃中学校・仲南こども園
P.10 ホッとニュース
P.11 シリーズ「声」

令和6年度　まんのうの教育

自立へ向かう教育

―協働を幹にして学びをつくる―

令和６年度　まんのう町学校教育実践指針より

今年度の重点

1 未来を切り拓く子どもを育てる園・学校づくりをめざします

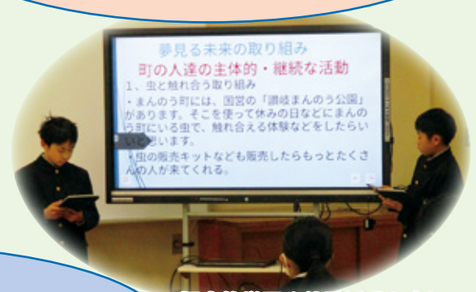
ICTを効果的に活用

豊かな学びを育む教育課程の編成

2 一人ひとりの子どもが安心して楽しく過ごせる園・学校づくりに努めます

3 「主体的・対話的で深い学び」に向かう保育・授業づくりを推進します

一人ひとりの居場所づくり



探究的学習や体験活動を大切に

4 園・学校と地域が協働して子育てにあたります

地域と学校が双方向の交流を

地域とともに主体的に活躍できる場を

教育委員会では、教育に当たって大切にしたいことを「学校教育実践指針」として示し、町内すべてのこども園・小・中学校が同じ目標に向かって進むようお願いしています。各こども園・小・中学校では、今年度も、豊かなつながりと温かなまなざしのもとで、子ども一人ひとりが自立に向かう力を身につけていけるよう取り組んでいきます。

卒業式・修了式

中学校　３月１２日
小学校　３月１４日
こども園３月１５日

証書授与

お祝いのアーチをくぐって

卒業合唱

6年間の成長を感じます

鼓笛で見送り

お別れの言葉

こども園107名、小学校156名、
中学校157名が修了、卒業しました。

希望いっぱい　旅立ちます

希望溢れる新たな出発

中学校　４月　９日
小学校　４月１０日
こども園４月　９日
※満濃南こども園４月８日

入学式・入園式

凛々しい表情で、式に臨んでいます

新入生入場

教科書をいただきました

通園帽子をいただきました

児童代表歓迎の言葉

桜をバックに全員集合

在園児から歌のプレゼント

こども園８０名、小学校117名、
中学校151名が入園、入学しました。

わくわくドキドキのスタート

子どもを伸ばす魔法の力

非認知能力

「非認知能力」とは？

読み書き、計算、IQ（知能指数）など、テストで測定して数値化できる力は「認知能力」といいます。これに対して「非認知能力」は、測定することができず目に見えないけれども、幸せに生きていくうえで大切な力のことです。自制心、想像力、集中力、コミュニケーション能力、創造力、協調性、勤勉性など数えきれないほどたくさんの力が、これにあたります。

人の土台が作られる幼少期は脳がよく発達し、「非認知能力」が育まれやすいと言われています。

興味深い社会実験

米国の経済学者ジェームズ・ヘックマンが実施した「ペリー就学前プロジェクト」と呼ばれる社会実験（1962～1967年）があります。「非認知能力」が注目されるきっかけになったとも言われる実験です。

それは、ペリー小学校付属幼稚園に通う3～4歳の子ども123名を対象に行われました。抽出されたのは、低所得層の家庭で、かつ、学校教育上のリスクが高い（IQ 70～85）と判定された子どもたちです。

概ね、次のように実施されました。

◆対象の子どもを、無作為に2つのグループに分け、一方にだけ就学前教育を施す。
- 実施期間は30週間
- 子どもたちの自発性を大切にした質の高い指導

◆その後、追跡調査を行い、2つのグループを様々な項目で比較する。
- 3～11歳までは毎年
- その後は14・15・19・27・40歳の時点

追跡調査により、就学前教育を受けたグループの子どもは受けていないグループに比べて、「年収」をはじめ「犯罪率」「持ち家率」「生活保護を受けた割合」などさまざまな面で、非常によい結果が得られました。ただ「IQ」については、一時的に上昇したものの8歳前後で大きな差がなくなったのです。

このことから、両者の差を生み出したのは、テスト等では測ることのできない「非認知能力」である、と結論づけられました。

このプロジェクトがおよそ40年をかけて明らかにしたのは、「幼児期に『非認知能力』を高めると将来によい影響がある」ということでした。このプロジェクトは、世界中の教育関係者が就学前教育の重要性を認識するきっかけともなりました。

日本でも、この流れを受け、2019年から幼児教育の無償化が開始されています。

POINT

AI（人工知能）との共存に不可欠な力

「非認知能力」は決して新しい力ではありませんが、これからの時代を生き抜いていく上で重要な力だとして、ますます関心が高まっています。

右の図を見てください。これは、非認知能力研究の第一人者、中山芳一氏（岡山大学准教授）の著書から引用したものです。

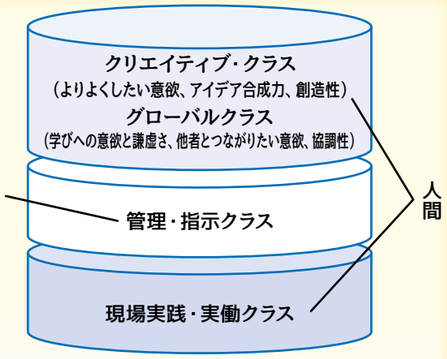
人間とAI。物質的な身体を持つ人間は、AIのように機械を持たなくともできることがあります（現場での実践や実働）。一方、「四六時中、状況や情報を正確に管理して的確な指示を出す」といった能力は、多くの人間たちよりもAIの方がはるかに優れています（管理や指示）。現在はどちらも、そのほとんどを人間が担っているこれらの役割のうち、「現場での実践や実働」を人間が、「管理や指示」をAIが担えば、協業は可能です。

しかし、そうなると、現在「管理や指示」の役割を担っている人間は、仕事を失うことになってしまいます。いったい、どうすればいいのでしょうか。

そこで提起されているのが「クリエイティブ・クラス」「グローバルクラス」といった新しい役割です。前者は、米国の社会学者リチャード・フロリダが着目した新しい階層。これに中山氏が後者を付け加えました。

これは、世の中をよりよくしたい、誰かとつながりたいといった意欲や、創造性、協調性など、人間だけが持つ力を発揮して取り組む「人間ならでは」の役割ですが、現時点ではごくわずかの人しか就くことができていません。

将来、この役割を多くの人間が担えるようになり、「管理や指示」をAIに委ねることができれば、右図の構造は実現する、遅くとも25年先には必至だ、と中山氏は述べています。



【人間とAIによる協業の構造】
人間がAIに仕事を奪われるという後ろ向きの発想ではなく、AIと共存・協業していくという前向きな考えを図にしたもの

これまでの役割分担のままでは、人間とAIが共存していくことは不可能です。

これからは、それぞれが得意分野の能力を発揮して役割分担をしていかなければなりません。

つまり、「管理・指示」はAIに任せ、人間は、これまでも担ってきた身体を使わなければできない役割や、意欲、創造性、協調性など人間ならではの力が求められる新しい役割を担っていくことが求められているのです。

そして、**この新しい役割にこそ、「非認知能力」が求められている**のです。

POINT

次ページでは、その「非認知能力」の秘密を、さらにくわしく解き明かします。

（参考・引用：『学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす』中山芳一著／東京書籍）

「非認知能力」の　ひ★み★つ

「認知能力」と「非認知能力」は、互いに影響し合いながら育まれていく、とされています。例えば、忍耐力や自制心をもって学習に取り組むほど、より多くの知識を身につけることができる、といったように、両者は密接に関連しているのです。

そして、「非認知能力」が高いほど、「認知能力」と「非認知能力」の両方を、より向上させる効果があることが明らかになっています。

★非認知能力は人間の柱や筋交い

壁・天井・窓・扉・装飾
→ 認知能力（知識・技能）

柱・筋交い → **非認知能力**

土台 → 自己肯定感（自己受容感）

「非認知能力」の分類や定義は様々。例えば右表の場合は、大きく3つに分類して整理しています。

いずれにしても、育てたい「非認知能力」をきちんと言葉にし、意識して取り組むことが大切だと言われます。

「自己肯定感」を非認知能力の中に含みこんでいる場合もありますが、中山芳一氏の著書（下部に記載）では、これをあえて土台に位置づけています。子どもは、自分という存在を無条件で受け入れてもらうことによって育まれた「自己肯定感」を土台として、様々な「非認知能力」を獲得し向上させていく、という考えからです。

★生涯にわたって伸ばせる「非認知能力」

幼児期に育てるのが効果的だと言われる「非認知能力」。しかし、幼児期に全てが決まるわけではなく、生涯にわたって伸ばすことができると言われています。学童期、思春期にも発達していき、さらに大人になった後も伸ばすことが可能なのです。

例えば、近年注目を集めている「グリット（やり抜く力）」。「情熱」と「粘り強さ」から成る力だといわれます。「グリット」研究の第一人者、米国の心理学者アンジェラ・ダックワース氏は、人生の成功へのカギは「才能」よりも「グリット」であるとし、この力は何歳になっても伸ばすことができるとしています。

ダックワース教授が実施した「やり抜く力」の鉄人たちへのインタビュー事例が実に多彩で面白い。（中略）そこから見えてくるのは、「天才」としか思えないような人びとは、つねに「もっとうまくなりたい」という強い意欲と、興味と、探究心を持ち続け、地道な努力を長年継続しており、それこそがまさに「超人的」であることだ。そのような超人的な努力を継続し、成功を収めるためにもっとも重要なのが「やり抜く力」である。

―― 訳者あとがき より ――

（『GRIT やり抜く力』アンジェラ・ダックワース著／神崎朗子訳：ダイヤモンド社）

（このページの出典・参考：『学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす』中川芳一著：東京書籍）

こんなかかわりが「非認知能力」を育む

- ◆子どもが自分自身と向き合える時間と環境を。
- ◆子どもが自分自身で選択や決定ができるようサポートを。
- ◆「固定的」「一面的」でなく、「柔軟」で「多様」なとらえ方で子どもを見て。
- ◆結果や才能、誰かとの比較でなく、その子が取り組んできたプロセスを評価して。「グリット」（P7下に記事）に注目したかかわり!
- ◆大人自らが、一人の人間として楽しむ、人にやさしく接する、悩んでいる姿を見せて。
- ◆上から目線のほめ言葉や注意だけでなく、対等な人間としての「ありがとう」や「ごめんね」を伝えて。

非認知能力		
対自的な能力	自分と向き合う力（自己内対話能力）	• **自制心**（感情の起伏などを我慢する力） • **忍耐力**（粘り強く頑張る力） • **レジリエンス**（立ち直る力） • **想像力**（広く深く想像する力） など
	自分を高める力（自己啓発能力）	• **意欲・情熱**（やる気） • **楽観性**（楽しい、もっとやりたいと思える力） • **自信**（自尊感情） など
対他的な能力	他者とつながる力（他者協働能力）	• **社交性・協調性**（その時々の周囲に合わせながら共に行動する力） • **コミュニケーション力**（他者と意思疎通を図る力） • **共感性**（他者の視点に立って他者を理解する力） など

園・学校ウオッチング

本校の校訓は「向学」「誠実」「信愛」、学校教育目標は「自ら考え、正しく判断し、たくましく行動できる生徒の育成」です。「たくましく行動」とは、自分が下した判断に責任をもち、多少のことではくじけずに行動することです。

令和5年度より校則改定、新制服導入、常置委員会の活性化などを進めており、生徒会役員が中心となって自分たちの中学校生活を改善しています。

生徒の話し合いで校則を改定する

学校生活をよりよくしたい、時代にあったものにしたいなど、生徒の思いから、校則について考え直しました。

学級会では、まず班で全員の意見を聞き、学級ですべての意見を集約しました。学級委員と生徒会役員が話し合う生徒企画委員会でも、安易に多数決を採ることはせず、本当に必要な改定であるかについて協議しました。3年生の生徒会役員は教職員とも話し合いました。話し合いを重ねる中で新たな課題が見つかり、時間をかけて丁寧に取り組みました。

何度も話し合い考えることで、現時点でよりよいと考える校則の改定ができました。しかし、今後きっと考え直す必要のある時がくるはずです。

生徒は、これからの予測困難な時代を生きぬいていくなかで、常に社会の変化を感じながら、問い続ける姿勢をもつことが大切であると学びました。

互いの意見や考えを認め合いながら合意形成を図り、これからも学校を、社会をよりよくするために行動していくことでしょう。

教職員との話し合い

学級会で熱心に協議

日々アップデートする生徒会活動

満濃中学校

新しい制服を考える

「性の多様性」をテーマに人権学習をしました。縦割りグループによる授業では、異学年の生徒と机を並べて意見を交換し、多角的・多面的に考えることができました。

性のあり方は特別な誰かの問題ではなく、自分も含めたみんなの問題であること、それぞれの人の感じ方や考え方の違いをお互いに受け入れて、尊重し合うことが大切であることを学びました。

また、制服について検討したいという意見が出て、後日、全校集会を開きました。生徒会長から「新しい制服のデザインについてはオシャレを意識したデザインではなく、多様性を取り入れたものになるように考えてください。みなさん一人ひとりの意見が、これからの満濃中学校をつくります。全員がしっかり考えて意見を出してください」との呼びかけがあり、全校生で制服のあり方やデザインについて話し合いました。

制服の見本を吟味する生徒

異学年グループで学び合う

常置委員会

常置委員会の活性化

「自分たちの学級のよさって?」「学校生活で困っていることって?」「学級や学校をよりよくするためにできることって?」学習支援ツール「コラボノート」を活用して毎月、学級の反省をしています。自分たちのよさや課題、課題への取り組みをグループでの話し合いを通して、コラボノートに記入しています。全生徒が各クラスのよさや課題をタブレットを用いて手軽に知ることができます。

「あのクラスのあれ、いいよね」「この取り組みをまねしてみたい」など、他クラスの取り組みをポジティブに捉え、委員会活動を活性化させています。

なかまに感謝を伝える

一緒に勉強し、学校行事に燃え、楽しく休み時間を過ごしているなかまに感謝を伝えたい、感謝を形に残したい、そんな思いから生まれたのが「サンキューシート」です。コラボノートを活用し、クラスメイト全員に感謝のメッセージを伝え合っています。

サンキューシートに入力する

今後も、生徒が自ら考え、正しく判断し、たくましく行動できるように学校づくりに努めるとともに、地域のボランティア活動や秋の公民館祭りに積極的に参加し、地域の方々と交流することで、少しずつ地域に貢献したいと思います。

ご支援、ご指導をよろしくお願いいたします。

思いをつなぐ 仲南こども園

園庭のネモフィラに願いを込めて

仲南こども園では、その子らしさや子どもの発想を大事にしています。そして、入園から修了までの園生活で、子どもたちが安心して遊びこんだり、子どもも大人もワクワクするような体験を重ねていったりしたいと考えています。

ワクワクは次につながる

3月の昼下がり、パジャマに着替えた2歳児クラスの子どもたちが廊下を小走りに移動していきます。「どこに行くの」と声をかけると、「あのね、今から絵本の部屋でお昼寝」とうれしそうに教えてくれました。

進級当初の4月は、保育室や担任が変わり、子どもたちにとっては不安な時期です。特に2歳児クラスから3歳児クラスになった子は、制服を着たり、上靴を履いたり、新しい友達が入園してきたりと初めてのことがいっぱいです。うれしいけれど「できるかな」と、ドキドキすることもたくさんあります。

そこで、4月にできるだけ安心して新しいスタートが切れるように、3月のうちから自分のお気に入りの上靴を用意してもらい、お兄さんお姉さんの気分になって履いたり、新しい保育室に遊びに行き、初めての玩具を見つけて遊んだりと、楽しい経験をしながら、ワクワク感をもって新学期へつないでいくようにしています。

新しい部屋で見つけたよ

私の上靴

「みんなのしたいことリスト」

みんなのしたいことリスト

修了を控えた年長組の保育室には、今年も、自分が友だちとやりたいことを集めた「みんなのしたいことリスト」が用意されました。

これは、修了式までの残りの日々をクラスのみんなで思いきり楽しんでほしいという担任の願いから始まった遊びです。クラス全員で楽しめる遊びであること、ルールは自分で友だちに伝えること、友だちのしたいことをみんなで経験することは決まっていますが、どんなことをしたいかはその子に任されており、担任は一人ひとりの思いを丁寧に聴いていきます。

「私はレストランごっこがしたい。メニューはオムライス、ハンバーグ、アイスクリームを絶対に作りたい」「みんなに1匹ずつ自分のニジマスを作ってもらいたい。そして、砂場にみんなで力を合わせて大きなもっこく池を作って泳がせたい」「僕は砂場でみんなにパンダを作ってほしい。できたら、ぼくが1匹ずつ餌をやりたい」などです。園生活で経験したことを再現したり、大好きなことを友だちと一緒にしようとしたりしていました。「へぇー」と感心する、その子らしい発想の遊びが飛び出しました。ドッジボールひとつをとっても子どもの数だけルールがあります。それを自分の言葉で友だちに伝え、クラスのみんなで一緒に楽しみます。

オムレツができました

砂場のもっこく池にニジマス放流

「みんなのしたいことリスト」は、まさに一人ひとりが主役になれる素敵な時間であり、その中で「この遊びはおもしろい」「○○ちゃんはこんな遊びを考えられるんだ」など、友だちが考えた遊びやアイデアから、友だちのよさもたくさん発見します。

そして、考えた子も友だちも、みんなが大満足の時間を過ごし、今年も全員のしたいことを終えました。

この「みんなのしたいことリスト」は、園を修了してからも子どもたちの心に残っているようです。小学校の生活科の授業や異学年交流の活動を考える時などに園での経験を思い出し、計画の話し合いや準備、ルールの説明などを自分の言葉でしようとしていたと小学校の先生から聞きました。こども園での遊びの中で培った力や育ちが小学校へとつながっていてうれしくなりました。

メニューを作ろう

ネモフィラの花に思いを託して

子どもたちと秋に、園庭の築山近くの木の根元にネモフィラの種を撒きました。園庭を子どもたちと作り、春、1年生になった子どもたちが登下校時のバスから見て、安心できるようにしたいという願いを込めました。

そして、修了式の日、まるで子どもたちをお祝いするかのように、数輪の小さな青い花を咲かせました。暖かくなるころにはもっともっとたくさんの花が咲き、毎年、子どもたちをそっと見守ってくれることでしょう。

もうすぐ咲くね

早いもので、仲南こども園は開園から10年目を迎えました。これからも毎日の生活の中で様々な出会いを大事にしながら、子どもたちとともに園の文化を未来につないでいきたいと思います。

ホッとニュース

教職員の人事異動

退職及び町外へ転出する教職員を各校の校長が紹介しました。

小・中学校合わせて4名の教職員が、令和5年度末をもって退職されました。

子どもたちが大変お世話になりました

まんのう町では毎年、3月31日付で退職と町外の学校へ転出する先生方の合同離任式、4月1日付で新規採用と町外の学校から転入する先生方の合同着任式を満濃中学校のランチルームで行っています。

着任した教職員を各校の校長が紹介しました。
その後、末久生涯学習課長が、まんのう町の概要を説明しました。

子どもの心に温かく寄り添った指導をお願いします

おしらせ

ICT支援員を学校教育課に1名配置し、学校や園のICT化の手助けをします。

学校現場では1人一台端末が実現し、ICT機器は文房具になりつつあります。

ICT機器を使いこなすために、指導者には事前に様々な設定や準備が必要です。子どもたちは、授業のどの場面でどのように活用していくかを正しく選択する力を伸ばすことが必要です。その実現に向けて、精一杯務めさせていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

ICT支援員　金森由美

まんのう町教育支援機構 育成センター「らいむ」所長が変わりました

この度、少年育成センター「らいむ」に着任いたしました橋塚智教です。

本育成センターは、低年齢化、多様化している非行の未然防止、そして子どもたちの健全な育成のため、補導活動、相談活動、環境浄化活動、広報・啓発活動、小さな親切運動などに取り組んでいます。

これまで同様、家庭、学校、地域が一体となり、子どもたちを様々な角度からサポートできるような体制づくりに努めてまいりますので、ご指導・ご支援をよろしくお願いいたします。

シリーズ『声』

第29回 専門職から見た子どもたち ～保健師・社会福祉士の立場から～

まんのう町役場の職員には、保健師や社会福祉士がいます。それぞれ専門職の立場で子どもたちと関わっています。
そんな職員の声を聞きました。

子どもたちの笑顔のために

みなさん、「子ども家庭総合支援拠点」ってご存じですか。ここは令和5年1月に福祉保険課内に開設された、町内すべての子どもとその家庭（妊産婦を含む）を対象に、相談全般から専門的な支援までを行う窓口です。

私はこの部署に配属になって2年目の保健師です。それまで高齢者部門の勤務が長く、私自身子育てを卒業しているので、悩みごとや困りごとの一つひとつをとても新鮮に感じています。例えば「イライラしてつい子どもに強く当たってしまう」「周りに頼れる家族、友人がいない」などの子育ての相談だけでなく「父、母、パートナーからの言葉や行動について聞いてほしい」と言った家庭に関するあらゆることについても話を聞いています。

対応する時に私が大切にしていることは、「子どもたちの笑顔のために」です。この言葉の背景には「子どもたちの安心・安全」が欠かせません。ですから「虐待」が疑われる場合は、関係機関と連携して対応することもあります。

虐待の中で多いのが「心理的虐待」です。子どもたちの前で父母などの身近な人が言い合いになった場合、たとえ暴力がなかったとしても、乱暴な言葉や悪口によってそれを見たり聞いたりしていた子どもたちが心に傷を負えば、それは「心理的虐待」にあたります。子どもたちの心に大きな悪影響を及ぼす可能性があることを知っていただきたいと思います。

子どもたちは、家族のみなさんがそばに居ると表情が優しくて笑顔になりますし、好奇心いっぱいの眼差しで新しいことにも挑戦しようと試みます。このような光景を見ると「子どもたちは安心・安全の中で過ごせているんだなあ」と私まで温かい気持ちになります。

これからもこの笑顔のために、子どもたちとその家族のみなさんの気持ちに寄り添いながら、相談ごとの解決に向けて一緒に考えていきたいと思っています。

福祉保険課　保健師　三島　輝代

（様々な人と関わる職務の特性上、執筆者の写真の掲載はありません。）

子どもたちの思いやりの気持ちを大切に

私の所属する福祉保険課地域包括支援センターには、保健師・主任介護支援専門員・社会福祉士等の専門職が所属しています。そして、高齢者がいつまでも住み慣れた地域で生活ができるように、介護に関する悩みや心配ごと、健康や福祉、医療に関する相談や支援をチームで行っています。

その中で私は社会福祉士として、主に次のような業務を行っています。介護・福祉・医療などのさまざまな「相談業務」、成年後見制度の利用支援、高齢者の虐待防止や早期発見・早期対応などの「権利擁護業務」です。

近年増えているのが認知症に関する相談です。認知症とは、さまざまな原因で脳に変化がおこり、生活に支障をきたした状態をいいます。まんのう町では平成28年度より小学5年生を対象とした「認知症キッズサポーター養成講座」を開催しています。講座の中で、子どもたちは寸劇で役になりきって認知症の高齢者や家族を演じたり、グループワークで高齢者に対して自分ができることについて話し合ったりすることを通して認知症についての理解を深めます。そして、自分だったら何ができるかを考え、「思いやりの木」に貼る葉っぱに書き込みます。

さすが5年生。さっきまで笑い合っていた子たちが、葉っぱを前に真剣な顔です。遠方に暮らす祖父母に想いを寄せる子、少し前に亡くなった祖父母との思い出を教えてくれる子、認知症になった祖父母の介護体験を話してくれる先生など。その時、教室は「思いやり」に満ちています。

残念ながら現在の医療では、認知症を治すことはできません。だからこそ、認め合える社会へ、認知症になっても暮らしやすい町へ、町全体で取り組むことが必要です。

子どもたちの思いやりの気持ちが、社会を変える第一歩になってくれるよう、私たちはこれからも邁進します。

福祉保険課　社会福祉士　真鍋　裕子

まんのう町教育委員会だより　爽風　Vol.43
令和6年【2024】6月1日発行

編集後記

「日本のアンデルセン」と呼ばれる児童文学作家、小川未明の卒業した新潟県上越市立大手町小学校には、彼の代表作の一つ『野ばら』の石碑が立っています。その未明と出身地も小学校も同じ杉みき子さん。大先輩に憧れて同じ道を志したという杉さんの次のような文章が、母校の図書室前に掲げてありました。

人間の心には
たくさんの　ろうそくが
しまってあります
一冊　本を読むたびに
一本の　ろうそくに　火がともります
七冊の本を読めば
七本の　ろうそくに
あかりが　かがやきます
ともしてください
心のろうそくに
かぞえきれないほどの　ともしびを
それは
あなたが
ほんとうの人間になる道すじを
明るく　照らしてくれるのです
杉　みき子

なんと素敵な読書へのいざないでしょう。「この町は、自分にもっともふさわしい衣装として、冬という季節を選んだ」― 今も暮らす町、愛してやまないふるさとの冬を、そう表現する杉さん。音もなくしんしんと降り積もる雪と、あかりの灯った暖かな部屋。一冊、また一冊…と本を読むごとに心に灯るろうそくの火。そのいくつものともしびが、じんわりと心を温め、自分の進む道を明るく照らしていってくれる。

幼い頃から本を読むのが大好きだったという杉さんは、そんなふうに読書を積み重ねてきたにちがいありません。そして子どもたちにも、心にたくさんの火を灯してほしいと願いながら、お話を作り続けてきたのでしょう。

さて、読書と学力との相関関係については、これまでも様々に指摘されてきましたが、非認知能力についてはどうなのでしょうか。

本の中で私たちは、言葉を通して様々なモノやコト、気持ちや考え、情景や状況、そして人の生き方に出会います。それらに触れ、それらを味わい自分の中に取り込んでいくことで、語彙は耕され、豊かになっていくのです。知識を得ることも、考えることも、想像することも、気持ちを伝えたり相手の気持ちを汲み取ったりすることも、全て、持っている語彙を超えてはできないことを思うと、私たちは「言葉とともに生きている」と言っても過言ではありません。

読書によって灯るたくさんの火は、増えていく語彙とともに豊かになっていく心そのものなのではないでしょうか。それは情熱の火、自制心や思いやりの火、やり抜く力の火…。それら、数えきれないほど灯ったたくさんの火は、きっと子どもたちを力強く励まし、勇気づけ、豊かな人生を歩んでいくための道しるべとなってくれるにちがいありません。

（Y.T）

表紙絵：河西　紀亮（満濃中学校教諭/美術部顧問）

次号予告（8月1日発行）

特　集　園・学校ウォッチング

ここが自慢！わたしたちの学校

長炭小学校・琴南こども園

発行責任者：まんのう町教育委員会　〒769-0313　香川県仲多度郡まんのう町生間415番地1
TEL（0877）89−7100　FAX（0877）89−8100